

たものと思つて居た。また、
若しも私が一つの心を破れることから保つ
事が出来たなら、
私は此世に空しく生きて居るのではない。
若しも私が一人の人の惱みを安め慰めるこ
とができたなら、

又はたゞ一つの苦痛を静めることでもでき
たら、
さなくとも、一羽の疲れたこま鳥を、再び
彼の巣に助け入れてやることなりと出来た
なら、

私は此世に無益に存在して居るのではないか。
(ジヤロット、プロンテ)

と云ふ詩は、やはり女子にその爲すべきこと
安んすべき處を知れど、歌つて呉れたものと思
つて居た。むつかしい自覺とか何とかいふことを
考へずとも、幸福に努力の対象を見出して、
自分の力の足りないことを悔む他には、主觀的
に不幸を感じることなしに、私は過して來た。

そして「女子」の天職とか本分とか云ふことも、
種々の書物や先生方の御話によつて示される毎
に、多く説明していたいからすとも、その「成
る」よりも「爲す」にあることを、容易く理解し
て居つた。しかし今はや自分達の生徒として
女子を取り扱はねばならぬ身となつて、一層懇
ろに「女子」といふことを考へなければならぬこ
ととなつた。且つ自分も女子であるので、今迄
いろ／＼と「女子」といふことに就いて、教へら
れ、聞かされ、求められたことを、自分は如何
に解して居たのであらうかと、反省して見たく
なつた。

標題に掲げたショツペンハウエルの女子に關
する論文を、その英譯されたものによつて、此
の夏休み前に見た時、私は直ぐと、嘗て「女子
の本分」と題して、下田先生が意譯して紹介し
て下さつたので讀んでラスキンの女子に就いて
の論説を想ひ出した。丁度前から一度原文を讀
みたいと想つて居たので、休暇中から今學期の
初にかけて、「シーセーム、アンド、リース」中

の、「オブ、クワイインス、ガーデンス」を讀んで見
た。私は兩方からいろいろの教訓を得た。そして
この兩者の思想を考へた時に、その著しい相
違を認めるごとに、それが現今女子の爲めに
考へられて居るいろいろの思想の、二つの矛盾
したアンダーカーレントに、或點は似通つて居
ると思つた。もとよりともに、十九世紀のドイツ
やイギリスの社會のために書かれたもので、私
どもがそれを見て驚いて、すぐ考へなほす必要
はなからう。しかしながら徹底した思想は常に新
しい生命をもつて、我等に何事かを教訓する。
それ故私は今、この兩者から與へられる問題の
若干を捉へて、それに就いて考へて見たいと思
ふ。

ショツペンハウエルの論文は、女子に就いての

消極的な思想の極端なものだと聞く。そして、
ラスキンのはその積極的な思想の代表である。
著者自身の人生觀や哲學觀によつて、兩論の
立脚地や色彩の異ふのは、云ふまでもない。然
あるが、私は大體においてショツペンハウエル

は事實に立脚し、ラスキンは理想に立脚し
て語つたと思ふ。私はショツペンハウエルの
見たやうな女子を、女子の本體とするのをな
きないと思ふ。私共はむしろラスキンの示
して理想に従つて活きたい。しかも。ショツ
ペンハウエルの論文は、我々女子に反省を促
す、適切な教訓を多く含んで居る、且又、のそ
て居る。私はそれ故に眞面目にこれを考へて見
た。ラスキンのは所謂「女子の本分」を、高尚
な目標のものに示して、我等の心眼を開いて下
さるもの、詩でなく教訓でなくして、詩と教訓
とを伴へる思想と自覺とを、我等の心に與へて
下さるものと思ふ。私はこれをも眞面目に考へ
た。

無自覺の安立は、自覺の伴つた安立よりも幸
福なものと、常に想つて居る。自身が意識せず
に、清く美はしい感情にひきもられて、よき朝
夕を送る人に、強ひて自覺を與へたくない。自
分にしても、刻々に湧き起る情緒情操を、そば

からく解剖して行くことを好まぬ。日常生活の一々に、きはどく理智を働かして行くのは情ない、たゞ何となしにふつくりと、うるみのある起臥をなしたいと思ふ。しかし如何なる場合にも、事實を採み消すことは出来ない。個人の自覺といふ厳しい鞭が、いつかは女子の上において來ることは免れないと思ふ。現に「女子の自覺」は、我國に於いての一問題を形成しやうとして居るではないか。鋭い理智の叫びを聞かされた時に、すぐ感情がやぶられて、それにまきこまれてしまはないために、又自覺といふものを、きりつめたゆどりのないものとしないために、我等は平素から準備をしておかねばならぬ。思索を喜ぶのは乾燥を求めるためではなくて、牙えたかけの中に潤みを保ちたい切な願からである。世の趨勢は日々に我等に迫つて容赦しない。女子教育上考ふべき問題も少くはなからう。婦人問題も今はさほど喧しくないとしても、その中の或ものは、早晚これに就いて考へねばな

の世態」に巻き込まれてしまつて居る世に對して、私はかう望まざるを得ない。社會の實際において、兩々相對の時には、決して理智の要求を以て接すべきではない。自然の感情や正義の發動を以て、やはらかに處してゆきたい。それ故平生第三者の位置に立つて、この兩々相對の場合のことを、正當に美はしく導き得る準備をしておきたい。修養といふものも、かういふものだらうと思ふ。そしてかういふ意味で私は思索を重んずるのである。

教育の任にあたる人は、どの方面からも、常に生徒及時代の一步先きに立つて考へねばならぬのに、我々は時代の自然の進行よりも却つて見たくなつた。思索のみが何物をも生じないかも知れぬ。花の如くたゞ天地の惠を喜んで、微笑んでも居りたい。しかしがうして思索に頼らうとするも、是非ない心の求めである。本論においては、まず第一に兩氏の論文を紹介し、

らぬ時も來やうと思ふ。世の中のことはキチンと一つの型に入れてしまつて、これが眞實正銘のものと、云ひきることはできないし、さういふものを造り上げたりすることはできない。私は狭い經驗を以て、自ら一天地を劃して井蛙の一生を送るよりも、大乾坤の大生命の中に立脚して、その自然の運行のまゝに悠々の生を送つて、我れ人とともにその生の自然の發展をなさんことを望んで居る。しかし自然は飛躍を許さぬといふ。理想や目標は彼岸にあつて、我々はそれに達する一步一步を、常に實際的に確實に進み續けねばならぬ。現今の社會の實情により添うて、漸次進まねばならぬ女子教育のためにも、我が皇國の前途のためにも、世の人が女子のため、今少し女子の本質やそのあるべきやうやうれに考へ合せて、冷静に判断して戴きたいと思つて居る。實際において、一個の男子の境遇や趣味やから導かれた獨斷的の要求ばかり多くて、適應性に富んだ女子は直きに「あるがまゝ

第二にそれから若干の問題を取り出し、第三にそれに就いて批評及論斷を下し、第四に結論として「女子」及「女子教育」についての私の考を申す積りである。

本論

(1) ショッペンハウエルの、女子に就いての論文。

ラスキンのは、既に「女子の本分」のあること故、ごく大体の要領と主眼とのみを、次ぎに紹介することとして、まず最初にショッペンハウエルの論文を紹介する。

(1) ショッペンハウエルの、女子に就いての論文。

これはミセス、ルドルフ、デルクスの英譯を、覺束ない讀書力を頼つて翻譯したものである。若しも著者の存意をとりそこねて居つたらば、誠にすまないことであるが、練習のためとも思つてしてみた。云ひまはしのまづいのを許していたいきたい。少し長いにもかゝらず、全文を掲げたのは、我が友に共にこれを讀んで考へ

ていたりきたいと思つてのことである。

第一、嘗てジユーラの云うた此等の言葉、即「婦人なしには人生は初らぬ。又婦人なしには快樂を感じることは出来ぬ」といふ言葉は、彼のシルレルの詩「婦人の品位」よりもよほど正しく婦人について賞讃の意をあらはしたものである。同一のことばバイロンの「サダメーナバルス」の中に、もつと同情深く歌はれて居る。「人間の生涯の一一番初めは、婦人の胸から逃り出る。汝の最初の小さな言葉は彼女の唇から教へられた。汝の最初の涙は彼女によつて拭はれた。そして汝の最後の嘆息は、多くは婦人の聞く所に發せられるだらう。男子は自分達を導いて呉れた恩人の最後の瞬間にも、それを懸ろに看護することなどは、あまり好まないであらうものを。」と云ふ。これは兩方とも、女子の評價についての、正當な意見をあらはしたものである。

我々は、女子の身体を見れば女子が精神的にも身体的にも、非常に澤山の仕事を爲すやうにつくられて居ないと云ふことが分る。女子はそ

毎日子供と戯れ、躍り騒ぎ、また子供のために歌をうたつてやつて居るかを見るがよい。そしてどんな男子でもが、世にありだけの好意をして見ても、とても彼女の代りにはなれないことを考へて見てもらひたい。

第三、自然是女子に對して、戯曲に於ける如くすばらしく目立つストライキン、エツフェクトにのとの考で、豊富な美とチャームの充實とを、その極く若い數年間丈けに、残りの凡ての生涯を犠牲として、與へて居るのである。この數年間に於て、女子は男子に對して強い牽引力をもつて居る。それで、男子が彼等に對して、何等かの形式で彼等を生涯立派に保護するやうにさせてしまふ程つよく、男子の心を捉へてしまふ。その時男子が少し静かにその事柄を考へてみたら、さうまでしなくとも好かつたと思ふにちがいないのであるけれども、實際この年頃の娘は、男子に對してこれほど強い力を有して居るのである、これは自然の意志である。自然是その常に行ふ經濟の法をこゝにも行つて

の生命に對する負債を、彼女が爲すことによつて還さないで、たゞその苦しむ事によつてのみ還すのである。その苦しみは、子供を産む苦しみ子供をはぐくみ育てる骨折り、良人に對する服従の苦しみなどである。(女子は男子に對して、つねに忍耐づよく且つ快活なる伴侣でなければならぬ)。

偉大な悲哀や偉大な歡喜や、力の偉大な表出は、女子に向つて計畫せられて居ない。女子の生涯は根本的に男子よりも幸なりとか不幸なりとかいふことなく、男子の生涯よりも、もつと静かに、もつとおとなしく、またもつと控へ目にがちに、流れゆくべきものである。

第二、女子は生れながらに、人生の初期即子供の、保姆として教育者として働くのに、都合よく適應するやうにつくられて居る。それはごく簡単な理由、つまり彼等自身が子供で、馬鹿氣で、淺見であるからなのだ。一口に云へば女は生涯を通じて大きな子供である。男子と小兒との中間の或る者なのだ。如何に若い娘達が、毎日

居る。つまり自然是他の總べてのものにならずと同じく、その存在を保護するのに必要な武器道具とを、その武器が女子に必要な年月の間だけ給して居るのだ。それ故、丁度牝蟻が子を産んでから後は、要らなくなつて寧ろ邪魔になるその翅を失ふやうに、婦人の多くは、一人か二人の子供を生んだ後には、その美しさを失つてしまふのである。これは兩方ともきつと自然の同じ目論見に違ひない。

第四、婦人は男子よりも早く成熟する。男子はその理性においても、他の精神能力においても、二十八歳位でやつと成熟期に達するのに、婦人は十八歳位で既に成熟する。その代りその精神能力、理性といふものは、極めて狭い範圍に限られて居る。これは女子が生涯を通じて、手近の物事ばかりを見、現在にばかりかぢり付いて居る。そして物の假相を眞相と信じ、些細の事柄の方が重大な事件よりも氣に入るのである。鳥や獸のやうに現在にのみ生活しないで、

過去や未來を觀又想ふのは、たゞ男子の理性の功德である。

女子は知力において淺薄であるから、たゞへ彼女がその直覺的の理解力の鋭さで、彼女の近くにある何物でもを、速かに認識することができるとしても、一方においては、その視力の及ぶ範圍が限られて居て、何でも少し遠くにあることになる。なかへ注意が及ばない。それ故、現在眼の前に無く、又過去や未來に属する事は、男子のやうに女子を煩はさない。

この事は女子が浪費の著るしい傾向を有して居て、時には狂氣の沙汰かと思はれるやうな振舞をさへする所以である。女子はその心の中では、男子は女子が浪費することのできる金を得るために存在して居るやうに考へて居る。出来ることなら、その良人の存生中にも、その金を勝手にしたいと思ふが、よしそれは出來なくとも、男子の得て呉れた金は、その死後には自分が勝手に費つても好いものだと心得て居るのだ。だから男子がその家を扶持するために金を與へ

を求むるために、その事柄に注意をひき戻してもらふことが肝要なのだ。女子が物の判断をする時に、我々よりも厳格で、又實際そこに在ること以上には、見ないといふも、女子の此の性質からの事である。我々は時に我々の感情が昂奮させられるごと、事の判断をする時に想像を加へたり、誇大したりしやすいものだ。

女子が不幸な人に對して、男子よりも餘計に同情を表するのも、やはり女子の理性の弱いことからで、つまり理性の足りない結果、女子はそういふ人に深切な興味を持つことができるのである。一方において女子は公正、正直、忠實などにおいては、男子に劣つて居る。且つ又その理性の乏しさのために、明白に見やすく、眞實で、現在に屬して居る事物に支配され、抽象概念や堅實な教訓や斷乎たる決心やによつて動かされず、又多く過去や未來を見、現在なく又遠くにある事柄を考へに入れたりしない。そこで女子は最初の根本的の德操は有して居ても、それを發達させるために常に必要な道具である所

るや否や、女子は此の所信の下に忽ち其れを費ひ果して終ふ。

しかし此等の不利益の他に、女子のこの性質から生ずる利益もある。それは女子は男子よりも現在に生きて居ること、又少しでも樂みの影のある時には、男子よりも強く樂しみ得るといふ事だ。これは女子に特有な快活さの根源で、又女子が男子の心を喜ばせ他に向けさすに適してをる理由である。

彼のドイツ人が昔なした如く、我々が困難な事件について女子と相談をすると云ふのは、決して見のがすべからざる事柄である。何故ならば、彼等の物事を見る仕方は、全く我々のとは異つて居るので、即彼等はその事柄に對して一番近い路を取つて迫つて行き、ごく手近に横つて居る事柄にのみ注意をむけるが、我々は常に却つて其れが我々の鼻の先に在るためといふ簡単な理由で、その手近な事柄を見逃して、す一つと遠方の事ばかりに考へを向ける癖がある。そこで我々にとつては、その手近な又單純な見方

の、第二次の能力に缺けて居る。女子は膽汁袋のない肝臓を有する有機体のやうなものだ。

女子の性格の基礎的の瑕玼は、彼等が「公正の感覺」を少しも有して居らぬと云ふ事である。これは女子の理性の不足からも起ることであるが、同時に又自然が女子を弱い性として、それを保護するのに方に頼らしめず、狡猾といふことに頼らしめるやうに定めた爲である。それだから女子は生得的に狡猾で、虚偽を言ふのを避け得ない傾向を有つて居るのだ。自然是獅子を保護するために爪と牙とを與へ、牡牛に角を與へ、烏賊に墨汁を與へたやうに、虚偽と欺謬とを以て女子の保護防禦の器となした。そして男子には体力と理性との形で與へたすべての力を、女子には皆この形式で與へたのである。その爲に欺きは、女子には賢愚を問はず、殆んど固有性をなす位、生れながらのものであつて、丁度前言うた、動物が襲撃を受けた時にその武器を用ふると同じく、機會さへあれば詐りを云はうとするのだ。そしてそつするなどを、たゞ

なのだ。階級の相違は、女子に於ては、我々の考へるよりも、もつと不安なものに考へられて居るらしい。従つて彼等の振舞が、すぐとそれによつて遣り口を更へるのであるらしい。さもなければ、我々に於ては、種々な事柄が複雑に心を制するにもかゝはらず、彼等はたゞ一つの事柄、つまりどの男子に彼等は愛を見出さうかといふ一つの事柄にばかり、心を制せられて居る爲からかもしれぬ。又或は彼等の職分の方に偏してゐるよりして、男子と男子とよりも彼等同士の間の關係が密接であるためからかもしれない。

第六、あの背の低い肩巾のせまい、腰の太い、足の短い婦人に、「美しき性」などといふ名を與へて居るのは、男子がその性的衝動のために、知性を疊らせられて居るからだ。人は彼等を美人と呼ぶよりも、むしろ非美學的の性だと云ふ方が適當だ。音樂にも、詩にも、又如何なる立派な美術に對しても、女子は眞の感動や、知覺をもたない。彼等が、斯様なものに趣味を有つ

れでも、この言が眞であるのを見出すにちがひない。まあ誰れども、音樂會や、オペラや、劇場での婦人の振舞、その愚鈍さ、子供らしさを見れば分る。かういふ場所で、彼等はその傑作中の一一番好い處が演奏せられて居る間中、饒舌をつゝけて居るのである。若しもギリシャ人が、女子を劇場に行かせる事を禁じたといふことが事實だとすれば、彼等は正當な處置をしたのだとうてよいと思ふ。

若し、女性の最も傑出した人でも、眞に偉大であり、天才的に特質のあり、獨創的であるものを、如何なる藝術の中にも完成して居られないことや、又永久の價値を持つやうな仕事を世界に與へて居ないことをよく知つて居たならば、何もそれと異つた事柄は、女子に向つて期待されない筈である。この事は繪畫において殊に著しい。その技術は彼等でも容易く我々と同等な處まで達し得られるから彼等は熱心に練習するが、それでもなほ彼等は眞に示すに足る偉大な繪は、一つも有つて居らぬ。何故かといふに、

六、杏 非美學的 の性 藝

て居る振りをする事があるのは、男子を喜ばせやうとの心で眞似事であるのだ。女子は何事に對しても、純粹な客觀的の興味をもつことはできない。それは次のやうな理由から来る。と私は信じて居る。男は何んでも物事を直接に支配しやうと努めるが、理解によつてなり、強迫によつてなり。婦人は何時でも何處でも、間接に支配するやうにさせられてしまふ。即ち、女子が物事を支配するのは、ひとり男子にのみ限られて居る。それ故に、女子の性質には、凡てのものを男子の心を得る方法としてのみ見るといふ傾向が横つて居る。そして彼女が他のすべてのものに對する興味は、常に假裝せられて居るのである。それは單に彼女の最終的目的を贏ち得るために、がための迂曲した道に過ぎない。それ故ルーソーは、「婦人は一般に如何なる美術をも愛しない。美術に對して何の品評をも爲し得ない。又美術に對してどんな天才をも持ち得ない」と云うて居る。假偽を洞察することができる人は誰

女子は繪畫において極適切に必要な、心の客觀性に缺乏して居るからである、彼等は常に主觀的な事柄のみを固守する。それ故、大概の婦人は繪畫に對して、眞の感動をもたないのである。

ハート氏は彼の著書において、婦人は高尚な學問の受容力をもたないといふことを論じて居る。個人的の特殊などりのけは、大体の事實を變へるものではない。婦人は全体として純然たる、到底治療の見込なき俗物である。處で、非常に不合理な處置、即婦人にその良人の稱號と位置とを分け前にすることを許したその背理な處置からして婦人はつねにその良人に高尚でない野心を起させるのである。且つ又彼等が下種であるといふ原因で、近時の社會では、女子がその社會の性質を作り、支配して居るので、直に腐敗して來たのである。彼等の位置に對しては、人はナボレオンの名言を注意する必要がある。彼は「婦人には位置がない」といつた又シャンフォーの言葉もある。「女は我々の弱點や馬鹿さを以て、あしらつてをればよいものだ。我々の理

性と彼等とは、何の關係もない。女子と男子との間には、單に表面的の同情が成り立つばかりで、精神や性格やの同情は甚だ僅である」と言ふのである。彼等はその點から見ても、二番目に位すべき性なのだ。それ故彼等の弱いといふことは忍容すべきであるが、しかし女子を極端な尊敬で取りあつかふことは、笑ふべきことである。そして同時に男子自身が、自分の眼で自分をひくゝ見て居ることになるのだ。

自然が人類を二つに分けた時に、彼女(自然)は正確に中央から兩分しなかつた。積極と消極との差は、たゞ質において許りでなく、量においてもあるのである。古代の人民や東洋の人はこの見識を以て女子を見て居るのである。彼等は我々よりもよく、女子の位置を知つて居た。馬鹿氣た尊敬を以て婦人に仕へるのは中古のフランシスの考へた、クリスチヤン、チュートニイ、バイワウの馬鹿さの產物である。この不合理な尊敬は、ペナレスの「神聖なる猿」を思ひ起させる程の過分な我儘と傲慢とを女子にさせるやうが

用になる。それは餘計なものとなる。サリー法に定められた所は自明の理となるのであるから。厳しく云へば、ヨーロッパの貴女は、我々の社會に不要なものである。我等の社會には、たゞ家の取締りと、そいふ女になりたいと望んでる娘とだけが必要なのだ。彼等は決して過分なことを望む者に育てあげてはならぬ。たゞ家庭的な恭順な女になさねばならぬ。ヨーロッパでは女性の大部分が、實際そのあるべき境遇よりも低い地位におかれ、却つて東洋人よりも不幸な有様に過して居るといふのは、確かにその一部に貴女といふ階級があるからであると思ふ。バイロン卿でさへもかう云つて居る「女子に就いては、昔のギリシア時代の女の位置が最も便利だ。今日の女子の有様は、騎士時代封建時代の、非文明な風習の残りである。人爲的で不自然なものである。婦人は家庭を心に掛けて居らねばならぬ。充分に食を與へられ、衣を着せられて居らねばならぬ。しかし彼等は社會に立ちまじる必要はない。宗教的にはよく教

になつた。ペナレスの「神聖なる猿」は、おのれ神聖さと、犯しがたき事を知つて、彼等が望むあらゆることを爲し得ると思つて居た。西歐において、レディと云はれてゐる婦人達は、誤つた位置に自分達を置いて居るのである。何故ならば、古人によつて「第二番目の性」といはれた婦人は、決して如何なる意味においても、尊敬と崇拜との目的であるやうには出來て居ない。その頭を男子より高く保ち、男子と同じ權力を持つやうにはつくられて居ないのである。この誤つた位置の結果は充分明らかである。故此歐洲の「人類の第二番目の人々」である所の人々が、彼女の自然の位置を指定されることは、實に望ましいことである。そうすれば「貴女難はのぞかれる。この「貴女難」は、啻に東洋人の凡てから笑はれるばかりでなく、ギリシア人やローマ人からも等しく笑はれる筈のものである。かくて女子がその自然の位置に立つたとしたら、我々の社交的政治的狀態が無限に改良せられるであらう。サリー法は不

育せられて居なければならぬが、詩歌や政治の書を讀む必要はない。信仰と料理との本の他は、何も讀ませなくともよい。音樂や圖畫や舞踏も教へるがよい。又園藝や、耕作の事も時々はさせるがよい。私は嘗てエビルスで、婦人が上手に道路の修復をしてをるのを見たことがある。だから女だとしても、秣造りや牛乳搾りの出来ない筈はあるまいに。」

第七、一夫一婦の主義の餘儀なくせられてゐる我々の世間では、結婚といふことは、人間の權利を半分にして、その義務を倍にすることを意味して居る。法律が婦人に對して、男子と同等な權利を許して居る以上は、女子も男子に等しい理性を具へてをらねばならぬ。しかし事實はこれに反して居る。法律は自然が婦人に向つて企てた所を乗り越えて、特權と尊敬とを婦人に與へてゐる。その乗り越えただけ特典を分けて貰つて居る婦人の數は減つてゐる。そして残りの人は、他の人が自然が與へたよりも多く與へられたやけ、自分達の自然の權利を奪

(結婚する)
はれてゆくのである。一夫一婦主義の組織においての不自然な位置と、それに伴ふ結婚の形式とが婦人に與へられてから、婦人は全く男子と同等なものとして一般に認められて居る。それで智慧のある聰明な男子は、かやうに不公平な處置に同意して、大きな犠牲をするまへに、よほど思慮するやうにさせる。そのために、多妻主義の國民の間では、凡ての婦人はみな扶持の方法を有して居るに拘らず、一妻主義の存立して居る國では、結婚する婦人の數は限られて居て、無數の婦人は支持されることなしに、残されて居る。是等の殘された婦人は、上流社會では不用な老娘として空しく世を送り、下流社會では好ましからぬ困難な勞動をして居るか、さもなければ操を賣るやうな人となつて、名譽を汚し、喜悅の無い生涯を送るのである。しかし性この一妻主義の社會では、かうした婦人は男子にとつて必要なものとなつて居る。それ故彼等の位置は、運命の恵をうけて良人を得、又は良人を得ることのできる幸福な婦人達を、誘惑か

犯することは、彼等を不幸にするのである。例へば多くの男子は、彼等が社會上の位置と金錢上の位置との關係からいへば、華々しい結婚をするのでなければ結婚は好んでなすべきでないとか考へて居る。そうでなければ、男子はこれとはちがつた事情の下に自分の好む婦人を自分が擇んで、結婚後はその妻子を幸福に生活させることのできるやうにしやうとする。しかしその事情がどんなに正當に合理的であつて、その女子が、文明な社會の基礎としての結婚によつてのみ生ずる不相應な特權を手放してしまふことを同意した所で、人間といふものか、お互に他人の意見によつて動かされるやうに出來て居る以上は、その華々しくない事情の下に結婚した婦人は、幾分その名譽を失つて、生涯を淋しく送るといふやうになるのである。もしも女子がこれに同意しなければ、自分の好まぬ男子と結婚せねはならぬやうになるといふ危険を、わざわざ迎へるやうなものである。そもそもなければ、生涯を萎縮して老娘の境遇にお

ら禦ぐための特殊の方法として、公然と認められて居るのである。ロンドンだけでも、かやうな婦人が八万人程も居る。このなきない境遇に陥る婦人は一妻主義の神壇の前に、人身御供として供へられた婦人でなくて何であらうか。これらの婦人は虚偽と過分な望みをもてるヨーロッパの貴女達に對して權衡を保つために避けがたきものであるのだ。そこで、多妻主義はこれを全体として考へれば、どうしても女性のために眞の仁惠である。且又一方には、その妻が永の病氣に脳んでゐたり、子供がなかつたり又は妻が次第に年寄つて、自分のためには年寄りすぎるやうになつた男子が、第二の妻を娶つてはならぬといふ理由もあるまいと思ふ。多數の人は、この一妻主義の不自然な組織が不都合なためによつて、餘儀なくモルモン宗に歸依するやうになるのだ。

婦人に對して不自然な權利を與へたと云ふことは、また彼等の上に不自然な義務を與へた。幾ら不自然であるとは云つても、兎に角それを

かねばならぬ、何故ならば、女子が家庭を見出するために許された時間は極めて短いからである。一夫一婦主義の此方面に就いてトーマスの深く研究して書いた「娼婦」といふ論文がある。これは讀むに値するものである。即ちすべての民族の間に、又凡ての時代を通してルートルの宗教改革までは、妾を置くことは許された。否、それはある程度に於て法律によりても認められ、又社會からも何の不名譽ともならぬ一種の制度であつた事を云つて居る。處がこれはルートルの宗教改革の時には、これが僧侶の結婚をも正當とするといふ理由に、新教の方では認めたので、舊教徒の方では、これに負けてはならぬといふので、固く一妻主義を主張するやうになつたのである。多妻主義に就いて、今更とやかく辯を費すのは無益なことだ。それは事實として何處にでも行はれて居ることである。だから唯、それをちゃんと整頓するといふことが、解決すべき問題なのだ。一體何處に眞の一夫一婦主義の行はれて居る處があらう。我

々皆何にせよある期間は多妻主義に生活し、多數の人は常に多妻主義に生活してゐる。つまり各の男子は多くの女子を要するのだから、多妻主義を許す程正當なことは無い。否、男子をして、多くの女子を支持し得るだけの準備をさすことにはしたことはない。この方法によつて初めて、女子はその適當な自然の位置、即ち從屬者としての位置にかへされるのである。そして歐洲文明及^{ヨーロッパ}の馬鹿さの産みだした妖怪である貴女は、その嘲笑ふべき要求、即崇拜せられ尊敬せられやうとの要求を以てゐる貴女はもはや存在しないこととなるのである。その場合にも猶ほ婦人は存在するであらう。しかし現今ヨーロッパに満ちて居る不幸な婦人は決して存在しないに違ひない。

モルモン宗の立場は正しいのである。

第八。印度に於ては、どんな婦人も決して獨立して生活することは無い。彼等はみなマヌ法典に従つて、その父が良人か子供か兄弟かの支配の下に置かれて居る。それは確かに寡婦が、

その死んだ夫の死屍のために犠牲となることは忌はしき事であるが、なほその他に、男子が彼の子供のために働くといふ希望で、熱心に働くを得た金錢を、女子の情夫に浪費されることも厭ふべき事である。

母親の最初の愛は、人間に於いても他の鳥獸においても同様に、純粹に本能的のものである。それ故、子供が生長してもはや身体的の扶助を要しない頃になると、その最初の愛は息んでしまふものだ。それから後には、その愛は習慣と理性との上に置かれた愛と、置きかへられるものなのである。しかしこの第二次の愛は、現ばれずに止むことが屢々ある。ことにその母と父とが、互に相愛して居ない時などには、これが多い。然し、父親のその子供に對する愛は、これとは違つた性質のもので、母の愛よりもつと眞實なものだ。父の愛は、父親たる人がその子供の中に、内部的自己を再認するといふ所に在るもので、その根本は一層心理的のものである。

新舊を問はず恰んどすべての民族、例へばホツラントットのやうな種族の間にさへも、家産は男性の子孫にのみ嗣がることになつて居る。これに離れて居るのは、ヨーロッパばかりである。男子がその長く續けた努力と、因難な仕事とによつて艱苦の中に得た金は、ヨーロッパでは後には女子の手に入るのだ。而してその女子はその理性の缺乏のために、僅かの間にこれを費ひ果してしまふと云ふことは、それが普通であるだけそれ丈け、不都合な事だと思ふ。それ故婦人には財産相續のことは、制限すべきであると思ふ、若しも婦人は、娘にしろ寡婦にしろ、抵當によつて得られた生活に必要なだけの財産をのみ譲つて貰ふことができるといふやうに定めたら、それはよほどよい組織だと思ふ。男子の後嗣が無いならば、女には決して財産や資本を譲るものでは無い。金をつくったのは男子だ。女子ではない。それ故女子は無條件で金錢を所有することも出來なければ、又それを支配することも出來ない筈のものである。女子は富

の自由な處分を許されない。即ち資本金とか家とか土地とかを勝手に始末すべきものでない。彼等は常に後見人を要する。それ故どんな事情の下にも、又何時たりとも、女子がその子供の後見人となることは出来ないのである。

婦人の虚榮心は、たゞへそれが實際は男子のよりも大きくなるのであるとしても、斯ういふ悪い所がある。それは婦人の虚榮心は直接に物質的のものに向ふといふことである。即、女子が肉體の美や金銀の輝きや、華麗な飾りやを喜んで外見をよくしやうと願ふことである。これが女子が社交界に於て大得意になるわけでそしてこれが女子全体を浪費に傾かせる理由である。ことに一向理性がないときは女は浪費の傾向が著しい。男子の虚榮心は、これと違つて多く非物質的の、智とか學とか勇とかいふ方面に向ふものである。アリストートルは、その著「ボリティックス」の中に、スペルタ^{雅典}人が、女に餘りに多くの權利を許し、財産相續や妻自身の財産を有することを得さしたこと、又澤山の自

◎嬉しきもの（寄宿舍枕の草紙）

由を女役に與へたことなどによつての不利益を説明して、又これが如何にスバルタの殘落に與つて力があつたかを言つて居る。若しもフランスにおいて、ルイ十三世の時から増して來た所の婦人の勢力が、フランスの第一革命を惹き起した政治及朝廷の腐敗を漸次に醸した所のものではあるまいか。而してその後の凡ての動亂は皆これに歸因するのではないか。

どんな場合においても、女性の誤った位置は、貴女の存在する處において明かに示されてゐる如く、我々の社會組織の上の、根本の缺點である。その失錯はその根本から前進して、あらゆる方面に害多き勢力を擴げて居る。婦人は自然によつて、「從屬すべく」つくられて居ることは、凡ての不自然な境遇、即全然獨立の位置におかれられた多くの婦人が、直さにその身を自分が支配せらるべきどんな種類かの男子に頼らせるやうにするといふ事實で、明かに示されて居るのである。これは女子は主人を要するからのことである。若しも彼女が若ければそれは情人で彼女が年寄りなら、それは僧である。（未完）

文苑

漢文及漢詩

◎贈羽峰南摩翁序

簡野道明

嘗觀世之士大夫。其奮於事功者。則懵於學術。邃於學術者。則迂於事功。能兼備之。若我南摩翁者。未多觀也。翁幼入鄉校。嶄然已見頭角。長游于昌平黌。業大進。其學戶祝程朱。旁採漢唐註疏醇正者。不必拘一家。兼通和漢史乘。尤長于文詩。文典雅明鬯。頗似曾南豐。詩則沈鬱頓挫。隨時敏給。格律精細。老而益進。殆將摩老杜壘矣。明治中興。辟爲京都中學敎習。尋歷仕太政官、文部省、東京大學。轉男女高等師範學校敎授。服職恪勤。三十年如一日。未嘗少懈。

あふごぢの語り。師の君のなさげ。病の床の愛の聲。面白う雪の降りたる。默學終てあらまして行く文箱の前、況してなづかしき父母はらから、慕はしき友垣のならむには、止む方あるき用事のため少し居過せる外出のひへるさ時もあらむに電車は停りぬ、胸いさゝしく迫り来て、兩の手して押しも出さむ心地せられ、我かの心地にて歸るほど、門前の時計は皆十分の餘裕を示したるうれしともうれし。寒き朝教室に出てたるに、いさ美はしうストーヴの燃ひたる。暑き日に窓の心地よく開きたる。冬休みすびつ圍みて急ぐ針の手針より先きに走る口、故郷の花を飾るもうれし。十分の休みの所用階段の下にてベルは響きぬ、心は空に足は宙人の見る目もあらばこそ、教室近く行く程に我がクラスメートの話題の花のはの見えたる。木枯痛くすさぶ頃、ボーラードに書かれし小包郵便、開けばこぼれ綿袍びふくふくと張り出づるまで入りたる綿よ、母の心の入りたりさうれし。歸る日待ちて未だ藤波のその頃より藤の實持たる、我が心ひきくらせる五月雨にしばし眺めざりしとある夕、いさ心地よく晴れければ先づ下り立ちて打見るに、思ひがけずもながう伸びたるにうれしさはるめなり。試験終はりて教室を出づる時、況して第一學の期試験にていさやかららむ行李の整理、保證人かり別れを告げむ、さて家包は何よけむ里の小川はいかならむ、鎮守の社はいかになど思ふ頃こそげにうれしきもの、限りなりけれ。（野薔）